

「救命講習」を伴う中高英語科授業のテキスト化

— 一次救命分野における ESP⁽¹⁾教育実践のための汎用性を追究する —

和 氣 依 子 (平安女学院中学・高等学校)

はじめに

2005年から現在にいたるまで、中学1年生～高校3年生（合計約400名）を対象に、傷病者と救助の協力者が、英語でしかコミュニケーションをとることができない状況を設定し、英語科の授業内で救命講習を実施してきた⁽²⁾。

この授業の目当ては、①適切な場面で英語表現を用い、他者とコミュニケーションをとることができる、②命の大切さを学び、応急手当が実践できる、③聖書の学び（「よいサマリア人」⁽³⁾に学ぶ隣人愛—道徳教育として）を日常的に反映させる、の3点である。

これまで、救命講習の技術指導については、「京都市消防局救急係」、および「NPO 法人大阪ライフサポート協会」の協力を得ている。しかし、本授業を実施できている要因としては、授業担当者（筆者）自身が、応急手当インストラクター資格を有する英語科教員であることが大きい。

目 的

上記授業そのものに対し、実施してきた学校の他教員からの評価が高い一方で、他教員が実践してみたいと思っても、実施しにくいのが現状である。本研究では、その原因を探り出すこと、および、英語科教員に限らず、他の専門教科の教員であっても、学級・学年活動、学校全体の取り組みの一環として実施することができるように、準備・手順をマニュアル化する際の参考になる情報を整理することである。

方 法

1. 対象者

全国の私立中学高等学校（1,636校）から、抽出を行った⁽⁴⁾。本調査では、標本200校を選び、アンケート調査の協力を要請した。標本は、系統抽出法を用いた結果、抽出間隔は8.18の値を得たが、各都道府県から最低1校が選ばれるようにするために、7.0とした⁽⁵⁾。さらに、男子校・女子校の割合をある程度確保するために、若干のコントロールを加えて抽出した。

2. 質問項目の作成

2005年から現在までに筆者が実施してきた、救命講習をともなう英語授業についての学習指導案や、結果資料（雑誌⁽⁶⁾、研究紀要⁽⁷⁾への投稿資料、発表⁽⁸⁾を含む）、受けた意見等をふりかえり、他校での実施を難しくしていると考えられる要因を詳細に抽出した⁽⁹⁾。次に、アンケート項目を作成し、勤務校の教員の協力を得て、パイロット調査を実施した。なお、アンケートは、①英語科教員用、②保健体育科教員用、③担任（かつ保健体育科・英語科以外）用、の3種を作成し⁽¹⁰⁾、同種のアンケートに対して、複数の教員が回答することを可能とした。

表1 配布したアンケート用紙

◎担任対象

【本研究の目的】傷病者と救急協力者が英語でしかコミュニケーションがとれない状況で、心臓蘇生法を実施する訓練を行うときに、どんな背景の教員でも講習を担当できるようにするためのテキスト作成の指針を研究しています。

<回答対象：◎保健体育科・英語科以外で、担任をお持ちの先生>
 該当する選択肢の番号に○をし、必要に応じて記述回答をお願いします。なお、本質問では、「救命講習」＝心臓蘇生法（AEDの使用を含む）とします。

A

問1 先生の性別を教えてください。
 1. 男性、 2. 女性

問2 先生の年齢を教えてください。
 1. 20代、 2. 30代、 3. 40代、 4. 50代、 5. 60代

問3 教職経験年数を教えてください。 ※2014年3月末時点で記入してください。
 ①中学校（ ）年・高等学校（ ）年 ←授業を担当した年数です。
 ◎通算で教職歴（ ）年 ←中学校の授業を同時に担当した年は1年で計算します。

※ 以下は、学級活動（ロングホームルーム）、学年の取り組み、など、担任として実施する（した）ことを前提にご回答ください。

B

問4 勤務校では、救命講習を実施しやすいと思いますか？
 1. はい（→問5へ） 2. いいえ（→問6へ）

問5（問4で、1.「はい」を回答）その理由を教えてください。
 1. 講習を実施するための備品（救命人形など）が校内にそろっているから。
 2. 管理職が協力的だから。
 3. 男女共修だから。
 4. 男子校（または女子校）だから。
 5. 自分と同じ性別の生徒を対象としているから。
 6. その他（.....）

問6（問4で、2.「いいえ」を回答）その理由を教えてください。
 1. 講習を実施するための備品（救命人形など）が校内にそろっていないから。
 2. 管理職の理解を得にくいから。
 3. 男女共修だから。
 4. 男子校（または女子校）だから。
 5. 自分と異なる性別の生徒を対象としているから。
 6. その他（.....）

—裏面につづく—

◎担任対象

C

問7 救命講習を実施する際、外部の団体（消防・日本赤十字社など）に協力をしてもらっていますか？
 1. はい（→問8へ） 2. いいえ（→問9へ）

問8（問7で、1.「はい」を回答）なぜですか？
 1. 学習指導要領で推奨されているから。
 2. 自分自身が心臓蘇生法を教授するのに十分な技量を有していないと思うから。
 3. 救命講習を受けたことがないから。（心臓蘇生法を習ったことがないから。）
 4. その他（.....）

問9（問7で、2.を回答）心臓蘇生法の講習を何回受講すれば、十分な技量を有したと実感できますか。
 1. 1回、 2. 2回、 3. 3回、 4. 4回、 5. 5回以上、 6. 10回以上、
 7. その他（ ）

D

問10 先生は、「英語で救命講習」は授業でできると思いますか。（この場合、傷病者と協力者が英語でしかコミュニケーションができない場合を想定しており、授業進行のための指示は、日本語で行うものとします。）
 1. はい（→問11へ） 2. いいえ（→問12へ）

問11（問10で、1.「はい」を回答）講習進行のための指示も英語でやったほうがいいと思いますか。
 1. はい（理由：.....）
 2. いいえ（理由：.....）

問12（問10で、2.「いいえ」を回答）あてはまるものを答えてください。（複数回答可）
 1. 自分の英語の発音が気になる。
 2. 発話するセリフに、カタカナの発音表記があればできると思う
 3. 発話するセリフ（日英対照表記）がまとまらなければ、できると思う。
 4. 救命に関する専門用語に詳しくないので、その補助資料があればできると思う。
 5. 受講生の数に見合った数の救命人形があれば、展開は可能だと思う。
 6. 心臓蘇生法の技量が不十分なので自信がない。（7.へ）
 7.（6.を回答）心臓蘇生法の講習を何回受講すれば、「英語で救命講習」の授業をするのに、十分な技量を有したと実感できますか。
 1. 1回、 2. 2回、 3. 3回、 4. 4回、 5. 5回以上、 6. 10回以上、
 7. その他（ ）

8. その他
 （できない理由・〇〇すればできるなど：.....）

【ご意見など】

ご協力ありがとうございました。

結果

1. アンケートの回収率

表2 アンケートの回収率

	男子校	女子校	共学校	合計
①配布した学校	27	41	132	200
②回答した学校	11	14	67	92
回収率(②÷①)	40.7%	34.1%	50.8%	46.0%

今回の調査における（2014年2月20日集計）アンケート調査票の回収率については、表2のとおりである。

2. 回答者の背景

回答者についての背景は以下のとおりである。

表3 回答者の背景

	性別				合計(人)	教職歴(回答者の平均) (中高同時に持った年は1年換算)				
	男性		女性			中学	高校	通算		
	人数	% (科内)	人数	%					人数	%
①英語科	58	62.4%	35	37.6%	93	7.8	15.1	15.8		
②保健体育科	79	84.0%	15	16.0%	94	8.8	15.4	16.0		
③担任	71	78.0%	20	22.0%	91	7.2	13.3	13.9		
①+②+③	208	74.8%	70	25.2%	278					
	年齢									
	20代		30代		40代		50代		60代	
	人数	% (科内)	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
①英語科	5	5.4%	31	33.3%	30	32.3%	24	25.8%	2	2.2%
②保健体育科	14	14.9%	29	30.9%	32	34.0%	19	20.2%	0	0.0%
③担任	14	15.4%	36	39.6%	28	30.8%	12	13.2%	1	1.1%
①+②+③	33	11.9%	96	34.5%	90	32.4%	55	19.8%	3	1.1%

3. アンケート結果

表4 勤務校で、救命講習を実施しやすいと思いますか

	はい		理由（複数回答可）									
	人数	% (科内)	1. 備品がある	%	2. 管理職が協力的	%	3. 男女共修	%	4. 男子校(女子校)	%	5. 同じ性別対象	%
◎保健体育科	72	76.6%	34	36.2%	29	30.9%	11	11.7%	7	7.4%	2	2.1%
③担任	66	72.5%	18	19.8%	27	29.7%	6	6.6%	8	8.8%	2	2.2%
②+③	138	74.6%	52	28.1%	56	30.3%	17	9.2%	15	8.1%	4	2.2%
	いいえ		理由（複数回答可）									
	人数	% (科内)	1. 備品がない	%	2. 管理職が協力的	%	3. 男女共修	%	4. 男子校(女子校)	%	5. 同じ性別対象	%
◎保健体育科	24	25.5%	13	13.8%	1	1.1%	2	2.1%	1	1.1%	0	0.0%
③担任	25	27.5%	13	14.3%	0	0.0%	2	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
②+③	49	26.5%	26	14.1%	1	0.5%	4	2.2%	1	0.5%	0	0.0%

表5 救命講習を実施する際、外部団体に協力要請をしますか

※CPR=心肺蘇生法														
	はい		理由（複数回答可）											
	人数	% (科内)	1. 指導要領で推奨	人数	%	2. CPR技量不十分	人数	%	3. CPR受講歴なし	人数	%			
◎保健体育科	66	70.2%	15	16.0%	21	22.3%	1	1.1%						
③担任	81	89.0%	7	7.7%	54	59.3%	4	4.4%						
②+③	147	79.5%	22	11.9%	75	40.5%	5	2.7%						
	いいえ		CPRの講習を何回受けると、十分な技量を有すると考えるか。											
	人数	% (科内)	1. 1回		2. 2回		3. 3回		4. 4回		5. 5回以上		6. 10回以上	
◎保健体育科	27	28.7%	0	0.0%	7	7.4%	9	9.6%	1	1.1%	13	13.8%	2	2.1%
③担任	10	11.0%	3	3.3%	2	2.2%	11	12.1%	1	1.1%	10	11.0%	3	3.3%
②+③	37	20.0%	3	1.6%	9	4.9%	20	10.8%	2	1.1%	23	12.4%	5	2.7%

表6 「英語で救命講習」の授業を実施することはできると思いますか

	はい		授業進行も英語でしたほうがよいと思う。*														
	人数	% (科内)	はい		いいえ												
①英語科	40	43.0%	12	30.0%	29	72.5%											
◎保健体育科	31	33.0%	6	19.4%	27	87.1%											
③担任	29	31.9%	11	37.9%	23	79.3%											
①+②+③	100	36.0%	29	29.0%	79	79.0%											
	いいえ		あてはまるものを回答(複数回答可)*														
	人数	% (科内)	1. 自分の発音	人数	%	2. カタカナ表記	人数	%	3. 日英対照表記	人数	%	4. 救命補助資料	人数	%	5. 救命人形の数	人数	%
①英語科	48	51.6%	2	4.2%	5	10.4%	28	58.3%	46	95.8%	5	10.4%	24	50.0%			
◎保健体育科	70	74.5%	23	32.9%	17	24.3%	35	50.0%	23	32.9%	8	11.4%	5	7.1%			
③担任	61	67.0%	19	31.1%	14	23.0%	40	65.6%	37	60.7%	8	13.1%	15	24.6%			
①+②+③	179	64.4%	44	24.6%	36	20.1%	103	57.5%	106	59.2%	21	11.7%	44	24.6%			
	いいえ		CPRの講習を何回受けると、「英語で救命講習」をするのに十分な技量を有すると考えるか。*														
	人数	% (科内)	1. 1回		2. 2回		3. 3回		4. 4回		5. 5回以上		6. 10回以上				
①英語科	0	0.0%	2	4.2%	8	16.7%	2	4.2%	8	16.7%	1	2.1%					
◎保健体育科	0	0.0%	1	1.4%	1	1.4%	1	1.4%	5	7.1%	2	2.9%					
③担任	2	3.3%	1	1.6%	4	6.6%	1	1.6%	7	11.5%	12	19.7%					
①+②+③	2	1.1%	4	2.2%	13	7.3%	4	2.2%	20	11.2%	15	8.4%					

考察

表4より、勤務校で、救命講習を実施しやすいと感じている(74.6%)理由は、管理職が協力的(1位)、備品がそろっていること(2位)であった。救命講習を実施する際、外部団体に協力要請をすると回答した教員は約8割を占め(表5)、その理由の第1位は、自身の心肺蘇生法(CPR)の技能が十分でない(40.5%)ということであった。保健体育科教員に限定しても同様の結果(22.3%)である。協力要請しない(=自分で実施できる)と回答した教員の2割以上は、「指導するのに十分な技量を有する」のは、CPR講習の経験が少なくとも3回または5回あること、との認識を示している。

表6より、「英語で救命講習」の授業を実施することができないと回答した教員(64.4%)のうち、過半数が、救命に関する補助資料があればできると考えている(59.2%)。この傾向は、英語科教員において、特に強く確認できる(95.8%)。また、実施できると回答した教員のうち、約8割が授業進行は英語でする必要がない、と考えている。受講者が指示内容を確実に理解できることに焦点を置くべきである、がその主な理

由であった(64.6%)⁽¹¹⁾。次に、「英語で救命講習」の授業を実施できないと回答した教員で、「指導するのに十分な技量を有する」のは、CPR講習経験が少なくとも5回(1位:11.2%)または10回以上(2位:8.4%)あること、と回答している。

結 語

考察内容から、「英語で救命講習」を授業で実施するためには、管理職の協力を仰ぐと同時に、必要な備品を十分に整備し、授業担当者としては、CPR講習を5～10回以上経験した教員を充て、説明および指示を日本語で行う形式で、進めるようにすることが望ましいと考えられる。必要に応じて、担当者用に、救命に関する補助資料を準備することが求められる。

最後に、本研究において、校務でご多忙の中、アンケート調査にご協力いただいた、全国92校、278名の教員の皆様方に対し、深く感謝の意を申し述べる。

注 釈

- (1) ESP=English for Specific Purposes. (2)・(7) 和氣(2008a).
- (3) 新約聖書「ルカによる福音書」第10章25～37節. (4) 内田(2010)参照.
- (5) [母集団の大きさ]1,636 / [標本の大きさ]200=8.18。1つの都道府県内にある、私立の中学校高等学校の数が、8校に満たないところがあるため、このように処置を施した。
- (6) 和氣(2008b). (8) 和氣(2010), (2011a), (2011b). (9) 千代・木内(2012)参照.
- (10) アンケートは大きくA～Dの4部門に分かれており、①はAとDのみ、②・③は4部門をたずねる内容で構成している。
- (11) アンケート部門D、問11の2. に対する、記述回答データ(本論文に未掲載)から分析した。

参考文献

- 内田治(2010)「すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析[第4版]」pp.2-25.
- 千代孝夫・木内俊一郎他(2012)「大規模災害訓練のアンケート調査から分析した集団災害発生時の医療対応の問題点と改善策」、『日本臨床救急医学会雑誌Vol.15, No.3』、pp.429-434.
- 和氣依子(2008a)「中学生・高校生を対象として『普通救命講習』をともなう英語の授業実施について」、『滋賀英文学会論集第14・15合併号 吉川千鶴子教授退職記念論集』pp.211-230.
- 和氣依子(2008b)「中学3年生を対象とした『普通救命講習』をともなう英語の授業実施について」、『月刊ホームルーム』、pp.56-59.
- 和氣依子(2010)「高校生を対象とした一次救命分野におけるESP教育の実践」2010年度大学英語教育学会(JACET)関西支部春季大会発表.
- 和氣依子(2011a)「英語科授業でBLS教育—『CPR講習+α』の構成により、受講者の再受講促進につなげる—」第14回日本臨床救急医学会総会・学術集会発表.
- 和氣依子(2011b)「中学生・高校生を対象とした一次救命分野におけるESP教育の実践」2011年度大学英語教育学会(JACET)関西支部40周年記念大会ポスター発表.